

霧の不二、月の不二

——明治三十六年八月七日御殿場口にて観察——

小島烏水

青空文庫

不二より瞰^みるに、眼下に翻^{ほん}展^{てん}せられたる凸^{レリイ}版^{ヴオ}地^{・マツ}図^ブの如き
 平原の中^{うち}白面の甲府を匱^めぐりて、毛ばだちたる皺^{しわ}の波を畳^たみ、そ
 の波頭に鋭^{えい}峻^{しゅん}の尖^{とが}りを起^たてたるは、是^これ言ふまでもなく金峰
 山、駒ヶ嶽、八ヶ嶽等の大嶽にして、高度いづれも一万尺に迫り、
 必ずしも我不二に下らざるが如し、不二は自らその高さを意識せ
 ざる謙徳の大君なり、裾野より近く不二を仰ぐに愈^いよ低^{よい}し、偉人
 と共に家庭居^{まとゐ}するものは、その那边^{なへん}が大なるかを解^あする能^{あた}はざる
 が如し。この夏我金峰山に登り、八ヶ嶽に登り、駒ヶ嶽に登る、
 瑠璃^{るり}色なる不二の翅^{しみ}脈^{やく}なだらかに、絮^{じよ}の如き積雪を膚^{はだ}の衣^へに著^つ
 けて、悠^{いう}々と天空に伸^のぶるを仰ぐに、絶高にして一朶^{いちだ}の芙蓉^{ふよう}、

人間の光学的分析を許さざる天色を佩^おぶ、我等が立てる甲斐の山の峻^{しゅん}峭^{せう}を以てするも、近づいて之^{これ}に狎^なるゝ能はず、虔^{つゝ}しんでその神威を敬す、我が生国の大儒、柴野栗山先生^{さんたん}讚嘆^{いは}して曰く「独立原無競、自為衆^{しゅう}壑^{かく}宗」まことに不二なくんば人に祖先なく、山に中心なけむ、甲斐の諸山水を跋^{ばつ}渉^{せふ}しての帰るさ、東海道を汽車にして、御殿場に下り、登嶽の客となりぬ。

旅館の主人、馬を勧め、剛^{がう}力^{りき}を勧め、蓆^{ござ}を勧め、編笠^{あみがさ}を勤む、皆之^{しりぞ}を卻^くく、この極楽の山、只一本の金剛杖^{こんがうづゑ}にて足れりとくわうぜつ

広舌^{りきよ}して、朝まだき裾野^よを往^ゆく。

市街を離れて里許^{りきよ}、不二の裾野は、虫声にも色あり、そよ吹く風にも色あり、色^{あるじ}の主を花といふ、金色星^{ゆふべ}の、夕下界に下りて、

莖頭けいとうに宿りたる如き女郎花をみなへし、一輪深き淵ふちの色とうたはれけむ
 朝顔あざなの、闌秋らんしゅうに化性けしやうしたる如き桔梗ききやう、蜻蛉とんぼの眼球がんきゅうの如き野
 葡萄ぶどうの実、これらを束ねて地に引き据すゑたる間より、樅もみの木のひ
 よろりと一際ひときは高く、色波の旋律を指揮する童子の如くに立てる
 が、その枝は不二と愛鷹あしたかとを振り分けて、殊ことに愛鷹あしたかの両尖りやうせんて
 点ん（右なるは主峰越前嶽あはいにして位牌ゐはいヶ嶽は左の瘤こぶならむ）は、
 躍をどつて梢とじに兔耳とじを立てたり、与平治茶屋附近虫取撫子なでしこの盛りを
 過ぎて開花するところより、一里茶屋に至るまで、焦砂せうさを匂におはす
 に花を以てし、夜来の宿熱ひを冷やすに刀の如き薄すゝきを以てす、雀すずめお
 どろく茱萸ぐみに、刎はね飛ばされて不二は一たび揺曳えうえいし、二たびは
 青木の林に落ちて、影に吸収せられ、地に消化せられ、忽こつえん焉と

して見えずなりぬ、満野肅まんやゆくとして秋の氣を罩こめ、騎客きかく草間に出没すれども、慘さんとして馬嘶いなうかず、この間の花は、磧かはらなでしこ撫子ほたる、蛩はた袋ぶくろ、擬宝珠ぎぼうし、姫百合ふき、欸芰ふき、唐松草等にして、木は百中の九十まで松属まつぞくの物たり。

一里松附近より、角度少しく急にして、大木を見ず、密々たる灌木くわんぼく、疎々そゝたる喬木けうぼくの混合林となりて、前者を代表するに萩はぎあり、後者には栗多く、それも大方は短木、この辺より不二は奈良の東大寺山門より大仏を仰ぐより近く聳そびえ、半なかばより以上、黄く柎わうしんは古びて赭あかく、四合目辺にたなびく一朶いちだの雲は、垂氷たるひの如く倒懸たうけんして満山を冷ひやす、別に風より迅はやき雲あり、大虚わたを亘わたりて、不二より高きこと百尺ばかり許なるところより、之これを翳かざし、山膚に

輝ひびを入る。雲消えて輝も亦拭またぬぐひ去らる、山色何の瑠璃るりぞ、只ただだ赭し丹やたん赭やたん黄やたんなる熔岩ようがんの、奇醜きしう大塊を、至つて無器用に束ねて蕞ざんり立せるのみ、その肩を怒らし胸を張れるを見て、淑美しゆくびなる女性せいせい的崇高を知らず。

馬返しより太郎坊まで、羊齒しだの小自由国や、蘚苔せんたいの小王国を保護して、縦落葉松の純林、戟ほこを揃そろへて隣々相立てるあり、これありて裾野の柔美式なる色相しきさうづ図に、剛健なる鉄銹てつしう色しよくを点ともし、無敵の冬をも呵かして、一路空山料峭れうせうの天に向ひて立つものあるなり。

太郎坊を出づるや一変して喬木を見ず、灌木はミヤマ榛はんの木はんの瘦やせさらばひたるが僅わづかに数株あるのみ、初めは草一面、後は焦沙せうさ

磊々たる中に、虎杖、鬼薊及び他の莎草禾本を禿頭に残れる二毛の如くに見るも、それさへ失せて、霧沸々として到るに遇ふ、天そゝり立つ大嶽とは是れか、眼前三四尺のところより胴切に遇ひて、殆んど山の全体なるかを想はしむ、下界屢ば見るところの井桁ほとなる雲の穴より或は皺を延ばし、或は畳めるは、応にこの時なるなからむや、今は山と、人と、石室と、地衣植物と、尽天地を霧の小壺に蔵せられて、混茫一切を弁ぜず、登山の騎客は悉く二合二勺にて馬を下る。

二勺より路は黒鉄を鍛へたる如く、天の一方より急斜して、爛沙、焦石、截々、風の噪ぐ音して人と伴ひ落下す、偶また雲を破りて額上微かに見るところの宝永山の赭土より、冷乳の缸

を傾けたる如く、大霧を揺るよと見る間に、急瀬上下に乱流する如くなりて、中霄に溢れ、片々団々、れて飛んで細かく分裂するや、シヤボン球の如き小薄膜となり、球々相摩擦して、争ひて下界に下る、三合四合、皆天には霧の球、地には火山の弾子、五合目にして一天の霧漸く霽れ、下に屯めるもの、風なきに逆しまに颺がり、故郷を望んで帰り去なむを私語く。この登山に唯一のおそろしきものゝやうに言ひ做す、胸突八丁にかゝり、暫く足を休めて後を顧る、天は藍色に澄み、霧は紫微に収まり、領巾の如き一片の雲を東空に片寄せて、透きわたりたる宇宙は、水を打つたるより静かなり、東に伊豆の大島、箱根の外輪山、仙窟に醸されたる冷水の如き蘆の湖、氷上を蹴べりて僵れむとす

る駒ヶ嶽、神山、冠ヶ嶽、南に富士川は茫々たる乾面上に、錐
 にて刻まれたる溝となり、一線の針を閃かして落つところは駿
 河の海、銀の砥平らかに、浩蕩として天と一に融く。

銀明水に達したるは午後七時に垂んとす、浅間社前の大石室に
 泊す、客は余を併せて四組七人、乾魚一枚、麩の味噌汁一杯、
 天保銭大の沢庵二切、晚餐の総べては是の如きのみ、葉マキ
 虫の葉を綴りて寝ぬる如く、一同皆蒲団に包まりて一睡す。

夜九時、大風室を四匹せる石壁を透徹して雷吼す、駭魄し
 て耳目きはめて鋭敏となり、昨夜御殿場旅館階上の月を憶ひ起し、
 一人窃に戸を排して出で、火孔に吹き飛ばされぬ用心して、這ふ
 が如く剣ヶ峰に到り、その一角にしがみ附きて観る。

霧収まりて天低う垂れ、銀ぎん錫しゃく 円盤大の白月、額に当つて空
 水流るゝこと一万里、截鉄せつてつの如き玄沙げんさ條しゆくこつ 忽として黒玻璃はりと
 化す。雲の峰一道二道と山の腋わきより立ち昇りて、神女白銀の御衣みけし
 を曳ひいて長し、我にいま少し仙骨を有するの自信あらば、駕がして
 天際に達する易行道いぎやうだうとなしたりしならむ、下は即ち荒邈くわうぱくと
 して、裾野も、森林も、一面に大瀛たいえいの如く、茫焉ぼうえんとして始処
 を知らず、終所を弁なぜず、長流言ながるはずや、不二の根に登りてみれ
 ば天地あめつちは、未だまいくほども別れざりけりと、まことや今日日本八
 十州、残る限くまなく雲の波に浸ひたされて、四面圓海くわんかいの中、兀立こつりつ
 するは我微軀びくを載せたる方幾十尺の不二頂上の一撮土さつどのみ、この
 とき白星を啣ふくめる波頭に、漂ふ不二は、一片石よりも軽且小なり、

仰げば無量無数の惑星恒星、爛^{らん}として、吁^あ嗟億兆何の悠^{いうえん}遠ぞ、
 月は夜行性の蛾^がの如く、闌^たけて愈^いよ白く、こゝに芙蓉^{ふよう}の蜜腺なる
 雲の糸をたぐりて、天香を吸収す、脚下紋銀白色をなせる雲を透
 かして、僅^{わづかうかゞ}に瞰^くひ得たり、この芙蓉の根部より匍^{ふくし}枝を出だしたる
 如き、宝永山の、鮮やかに黒紫色に凝固せるを、西へと落ちたる
 冷魂^{さび}の、鏽^{さび}におぼろなる弧線を引いて、雲と有^う耶無^や耶の境地に澄
 みかへれるは本栖湖にやあらむずらむ。雲は寄る寄る崖^{がけ}を嚙^かんで、
 刎^はね返されたる倒^{ローラア}波の如きあり、その下層地平線に触^ふれて、波
 長を減じたるため、上層と擦^{さつ}して白波^{サアフ}の泡立^{あは}つごときあり、之^{これ}を
 照らすにかの晃^{くわうく}々^々たる大月あり、その光被するところ、総^すべ
 てを化石となす、試^{こころみ}に我が手を挙^あぐるに、晶^{あきらけ}きこと寒水石を彫^ゑり

成したる如し、我が立てる劔ヶ峰より一步の下、窈然えうぜんとして内
 院の大窖たいかうあり、むかし火を噴ふきたるところ、今神仙の噫氣あいきを秘
 蔵するか、かゝる明夜に、鬚鬚あいたいとして立ち昇る白氣こそあれ、
 何物たるかを端知せむと欲して、袖底しうひに耐風マツチを擦さつするも、
 全く用を成さず、試に拳石を転ずるに、鳴鏑めいてきの如く尖りたる声
 ありて、奈落ならくに通ず、立つこと久しうして、我が五軀ごたいは、悉く銀
 の鍼線しんせんを浴び、自ら駭おどろくらく、水精しぼら姑く人と仮幻かげんしたるにあら
 ざるかと、げに呼吸器の外に人間の物、我にあらざるなり、おも
 ひみる天風北溟ほくめいの荒濤くわうたうを蹴り、加賀の白山を拍うちて旋かへら
 ず、雪の蹄ひづめの黒駒や、乗鞍ヶ嶽駒ヶ嶽かすを掠めて、山靈木魂やまたまこだま呐喊とき
 を作り、この方寸曠古くわうこの天地に吹きすさぶを、永冷ひようれい齒に徹

し、骨に徹し、襦袍どてら二枚に夜具をまで借着したる我をして、腮あごを以て齒を打たしむ、竟つひに走つて室に入り、夜具引き被かづきて、夜もすがら物の怪けに遇ひたる如くに顫おのきぬ。

翌朝四時十五分といふに、床を蹴る、未だ日の出を見ずして、

大島、利島、御蔵島の、糢糊もこの間に活いきて遊ぶにあらざるかを疑

ふ、三浦半島と房総と、長虫の如く蜿うねりて出沒す、武甲の山は

純紫にして、蒸々たる紅玉の日、雲の三段流れに沁しみ入りて、眩げんくわう

光を斜に振り飛ばすや、劒ヶ峰の一角先づ燧ひうちを発する如く反

照し、峰に倚よれる我が髭燃えむとす、光の先づ宿るところは、棟むね

高き真理の精しやうじや舎にあるを念ふ、太陽なる哉かな、我は現世に在り

て只ただ太陽を讃さんするのみ、顧れば甲武の山の若紫を焼いて、山肩せ

色^{んしよく}の暗潮一味を刷^はく。

下りて七合目に至る、霜髪^{おきな}の翁、剛力の肩をも借らず、杖つき
て下山するに追ひつく、郷貫^{きやうくわん}を質^{たゞ}せば関西の人なりといふ、
年齒^{ねんし}を問へば、即ち対^{すなは}へて曰^{いは}く、当年八十四歳になります！

青空文庫情報

底本：「日本の名随筆58 月」作品社

1987（昭和62）年8月25日第1刷発行

底本の親本：「小島烏水全集 第四卷」大修館書店

1980（昭和55）年3月

※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ケ」（区点番号5-86）を、大振りにつくっています。

※「劔ヶ峰／劔ヶ峰」の混在は底本の通りです。

入力：土屋隆

校正：門田裕志

2006年9月21日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.waozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

霧の不二、月の不二

——明治三十六年八月七日御殿場口にて観察——

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

著者 小島烏水

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しむ青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>